

近代ヨーロッパにおける国境と《境界》意識

阿 河 雄二郎

西洋史学研究のなかで「国民国家を超えて」ということが言われてもう20年ほどになるというのに、私たちは「国民国家」という土俵から一向に抜け出せそうにない。たとえば、このシンポジウムで取り上げようとする「国境」の問題は、実効的な領域支配に基づくものであれ、神話や伝説といった幻想に基づくものであれ、国民国家にとって琴線に触れる要素があって、普段は冷静に対処しているはずの人びとが突然理性を失い、ファナティックな行動に走ってしまう。先般この国の境界で発生した尖閣諸島や北方領土をめぐる問題がよい例で、ナショナルな意識が条件反射的に沸き起こってくるのは、国家という魔訶不思議な人工機械がもつ魔性のせいだろうか。

私が境界とか国境のことをそれなりに意識するようになったのは、数年前に田中きく代氏が座長を務める関西学院大学の共同研究班「歴史の諸相における《境界域》の総合的研究」に加わってからである。個人や、人間のおりなす集団である社会や国家といった共同体は、自己が有するアイデンティティなるものを内と外に向かって押し広げようとするので、その過程で、統合と排除、同化と差別という逆方向のベクトルを必ずといっていいほどに伴う。そこから対立や軋轢が生まれ、やがて抜き差しならない争論、ついには暴力へと突き進んでゆくのだが、境界は双方の接点であるだけに、緊張感がみなぎった空間となるだろう。そのように私は理解していた。

けれども、この問題を考えてゆくなかで、私が教えられ、共鳴する部分ともなったのは、境界を対立とか緊張だけではなく、双方が日常的に往来し、交流しあう局面に注目すること、換言すれば、「境界を中間項として、双方を媒介する役割、融和的で越境的な実在として捉えられないか」という田中きく代氏の指摘であった。その点をより明確に、氏は「こうした中間の領域（＝境界）の中間的存在こそが、歴史のなかの媒介項として、時代を超えて歴史をつなぎとめたのではないか」（田中きく代・阿河雄二郎編『《道》と境界域』昭和堂、2007年）と論じている。境界というと、島国育ちの私たちはリジッドな面にばかり目が奪われるが、実際に外国に出ると、あまりに簡単に国境を越えられるので、かえって拍子抜けすることがある。じかに向かい合い、境界を接しているところほど、長年の経験知を生かして、両義的で、融通性があっ

て、ファジーな性格が培われているのであろう。ある意味で、境界は平和的な領域である。このシンポジウムで国境を取り上げたひとつの理由は、共同研究を進展させて、境界のもつ多面的な役割を考えようとしたことにある。

この平和構築の問題に関して、近年、民族や国家の枠を超える政治形態として、地域連合、複合国家、国際連合など「連邦」のあり方が注目を集めているのは当然の流れであろう。ローマ帝国、イギリス帝国、ロシア帝国といったこれまであまり評判の芳しくなかった巨大国家も、かえって平和の手段やシステムを内包している点で評価されるようになった。また、世界をひとつのつながり（関係）として捉えようとする文明史、世界システム論、グローバル・ヒストリーも、有効な視点を提示していだろう。いずれにせよ、どのようにして対立を緩和し、紛争を解決し、平和を達成するかが、今ほど問われているときはない。

このシンポジウムでは、そういうことを念頭に、16世紀から19世紀末にかけてのヨーロッパを対象に、国境とか境界がどのようにつくられたのか、それがどのように機能しているのか、また、それがどのように認識され、根づいていったかを、指昭博、上垣豊、村上亮各氏の専門領域からアプローチしていただくこととした。いずれも興味深い問題提起となるだろうが、やや先走っていえば、指氏は島国的な性格をもつイギリスの領域・国土意識の成立の過程を、上垣氏は国民国家の形成期とされる革命・ナポレオン期フランスにおけるスイス統合という領土交渉のもつ危うさを、村上氏はハプスブルク帝国のなかに組み込まれたボスニアの法的地位をめぐる問題を論じることになる。これらの報告をもとに、活発な議論が展開されることを期待している。